



れしいねえ。オレも彼らから教わることがいろいろあるんだ。オレを名人だと言ってる人さ。80歳になっても迷ってる。だから進歩するんだよ。プロという言葉はオレは嫌いだ。プロというのは、出来上がった人だろ。

職人は、いつまでも未完成なんだ。だからいつまでも可能性があるんだよ。職人は失敗していいの。失敗したら、やり直しゃいいんだ。そうやって進歩し続けるのが職人なのさ」
止まらない話を区切るように、榎本さんは言った。

「人生は、川だな。晩年にゆったり大きく流れれたかったら、若いときに水を集めとくんだけ。苦労しても水を高いところに上げることだ。そうすりゃ、きつといい川ができるよ」
良い苦労をしなよ。職人の目は、そう語りかけていた。



PROFILE

えのもと しんきち

昭和2年、東京都文京区の職人の家庭に生まれる。小学校の頃から鏡コテを握り、左官職人となる。クワ貼りや化学塗料の蔓延を憂い、55歳で現役を引退。しかしその後、土の研究や誰でもできる土壁塗り技法の開発、子供たちへのヒカヒカ泥団子作り指導などを続け、自毛土房に教えを請う若い職人が常に集う。茶室の炉壇を作れる日本有数の一級職人である。

職人の技

シリーズ 14 左官職人

榎本新吉 さん

こんなにカッコイイ職人はめつたにいない。一見、酸素吸入器を常用する、枯れ枝のような老人。しかし榎本新吉さんは、今も熱心に土と泥の研究に取り組み、一級の技術を持つ現役の左官職人だ。歯に衣着せぬべらんめえ口調には、この仕事への深い愛情と洞察が満ち満ちていた。

「左官でえのはさ、土と砂とスサ(ワラ)などの繊維質)を混ぜて壁を塗る、それだけのものなんだよ。平らに塗れりゃいいのよ、平らにさ。」

「ヤリと笑いながら、榎本さんは言う。その『平らに塗る』ことの難しさを、榎本さんは知り尽くしているから。『オレは70年、土と砂とこねてる。だから、何と何をどう混ぜれば、どんな固さや強さや

もろさになるか、だいたい想像はつく。想像はつくけど、絶対じゃない。だから今でも毎日実験してるよ。若い左官は、出来合いの袋詰めの上まがいのものに、決められた水を入れて、それが壁土だと思ってる。本当の左官ってのは材料から、土から探すんだ。それをサボって十から百までしか学ばないから、百で終わっちゃう。オレは一からやってる。だから二百でも千でも行けるのさ。」

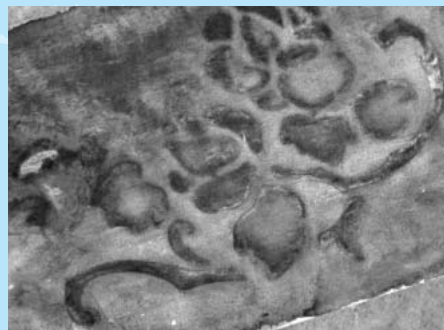
解が出ないと、これはなあ」と惜しげもなく知識を披露してくれる。面白い答えには、それが若い門外漢の話しても、真剣に耳を傾ける。

「昔の職人は、親方がこうだと言えば、それを真似するしかなかった。でもオレはいつも『そうかな?』と思ってた。だからケンカばかりだ。ケンカもたつて、殴り合つんじやないよ。左官なら、どっちが良い壁を塗れるかよ。年齢の上下は関係ない。相手がいい仕事をすれば頭を下げる、それが職人のケンカ。誰だって勝ちたいだろ、だから工夫するのよ。他のヤツにはできない壁を塗ろうと思つたよ。」

新築の家から土壁がなくなり、かつて家造りに欠かさない職人だった左官も、一時は「絶滅危惧職種」と言われた。最近になって、その風向きが変わってきた。シックハウスなどで土壁が見直され、久住章氏や狭土秀平氏といった「若き力リ」な左官職人が登場し始めた。若手の活躍を素直に喜びながら、榎本さんは世の愚かさを笑い飛ばす。「高度成長からうつち、効率だとかコストだとか、そんなことばっかり言いやがって。だからオレは50歳を過ぎて、商売としての左官に絶望して辞めちゃった。見てみなよ、化学薬品を使ったクロロスなんか張りまくって、子供たちにいいことあったかい? 土の壁は呼吸する? そんな当たり前のことを今さら騒いで、『自然素材』だつてんだからなあ。気付くのが遅いつての。家は商品じゃねえんだ。そこに人が住むんだろ? 安きゃいいはずないだろ? がよ。」

榎本さんは、左官の未来に誰よりも期待している。だから真つ直ぐにものを言つた。「一生懸命に壁を塗ってくれる若いやつらが出てきて、う

職人は、死ぬまで完成しない。 オレは名人じゃない、迷人なのぞ。



文 = 篠塚義成
text: Yoshinari Shinozuka
写真 = 林 泉
photo: Izumi Hayashi